藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 46:140-141, July 10, 1998

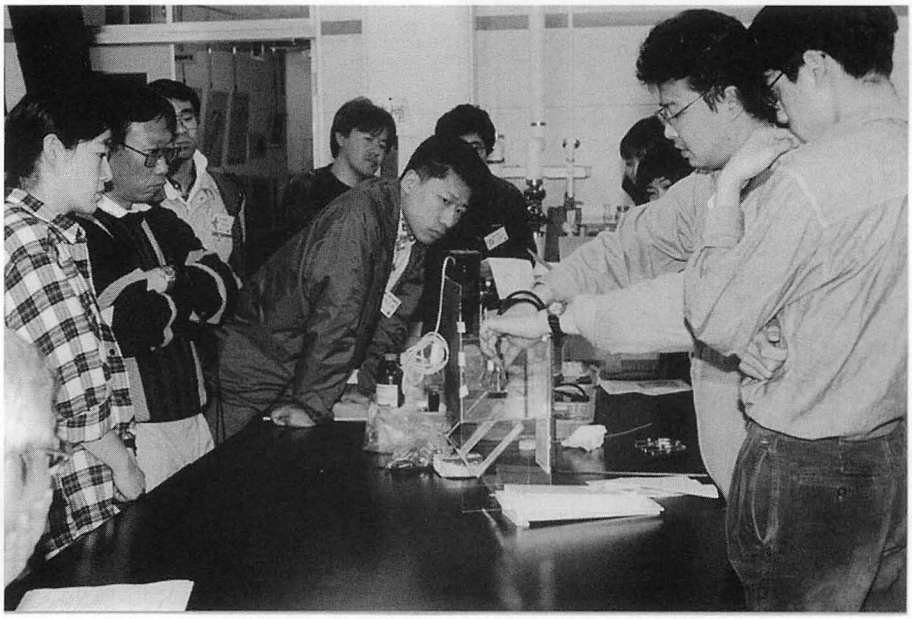
原　朋之：ワークショップ参加記
（1998年3月27～30日　於筑波大学下田臨海実験センター）

藻類学会が盛大に行われた後，こじんまりと開かれるはずのワークショップでありましたが，いざ蓋をあけてみると，エクスカーションの日程と重なったこともあり，学会に負けないくらいの盛り上がりでした。27日の夕方に集合して，さっそく皆で夕食。参加者同士うちとけたところで，翌朝の海中林観察をふまえた前川先生の講義が行われました。講義は前川先生が制作にたずさわられたNHKの特集番組のビデオを中心に行われました。磯焼けによる海中林の消失，そして消失した海中林を蘇らせようとする漁業関係者の方々の姿に，自然と人間の一筋縄ではいかない複雑な関係が垣間見えました。その中で前川先生は問題点を浮き彫りにして，海中林の生態的な役割の重要性を熱く語られました。

翌日28日は絶好の海中林観察日和となりました。観察はいくつかのグループに分かれ，シュノーケリングによって行われました。実験センターから5分ほどの灯篭の磯と呼ばれるところまで歩いて行きそこからエントリーしました。

心配された水温もそれほど低くなくウェットスーツでも充分でした。私たちのグループは前川先生が引率して下さいました。海中林の構成種は基本的に浅い部分をアラメ，深い部分をカジメが占めるということでした。このような立派な海中林を目の当たりにしたのは今回が初めてでしたので，海面に浮かび水中マスクを通して見おろしているだけでも感動的でした。海中林を実感するためには，少し怖くても頭から林の中に潜っていくのがよいとのことでしたので，意を決して潜ってみると，そこはまた別世界でした。薄暗いカジメの林の中から水面を見上げ，しばし不思議な気分にひたってしまいました（しかし実際は息が続かないのでこの間約3秒）。

海中林を堪能した後は，それぞれの実験材料の海藻などを採集し，まだまだ物足りない気持ちを残しつつ約1時間で観察会は終了しました。昼食では横浜先生自ら作ってくださった新鮮なワカメたっぷりのお味噌汁がふるまわれ，しみじみ参加してよかったと思ったのでした。具のワカメは研究材料とするために実験センターの技官の方々が養殖されたものとのことでした。



ワークショップのひとこま。光合成実験の準備。

午後からは事前にトロールで採集された生物をおおまかに仕分けした後，青木先生によるアマモ場の動物についての講義がありました。普段海藻は見ていても，海草に接する機会はあまりないので，アマモ場における，動物と植物の相互作用のお話は興味深いものでした。講義のあとは，採集した生物についての観察が続けられ，前川先生にはカジメの年輪の見方なども教えていただきました。

次に村瀬先生によるノコギリモクの生態についての講義がありました。ノコギリモクなどのホンダワラ類はガラモ場を形成し，水産，環境の面で重要な役割をはたしているということですが，その生態についてまだわかってないことが多いという事実は意外でした。村瀬先生が講義の中で紹介された培養実験や移植実験で得られた最新のデータの数々に大変刺激を受けました。

引き続いて行われた倉島先生による講義では，アラメやカジメ，アントクメの生活史や生理的な特性による分布の違いなどを教えていただき，午前中に観察した海中林についての理解がさらに深まりました。そしてその日の夜は，エクスカーションの参加者の方々と合同の大懇親会が盛大に行われたのでした。

29日は，班ごとに興味のある海藻を実験材料としてプロダクトメーターによる光合成測定を行いました。測定しにくいかもしれないと危ぶまれた海藻を選んだ班もありましたが，どの班も順調に測定を進めることができました。昼食は測定を続けながら実験室でとりました。そのときのおにぎりと今度はセンターの学生の方々が作ってくださったワカメのお味噌汁のおいしかったことはずっと忘れられないでしょう。

光合成測定の結果をまとめつつ，分光光度計を用いた光合成色素の吸光度測定も並行して行いました。各実験の結果はそれぞれの海藻がもつ生理的特性をおおよそ反映したものとなりました。この日の晩は，ワークショップ参加者による懇親会が行われました。前川先生が料理されたカツオに舌鼓を打ち，これまでの疲れも吹き飛んでしまうほどでした。

30日は，薄層クロマトグラフィーによる光合成色素の分析を行いました。各参加者がいくつかのサンプルを選んで，色素を抽出し，シリカゲル薄層プレートを用いて展開を行いました。これまでの改良の結果，薄層クロマトグラフィーによる光合成色素の分析はきわめて簡単な実験になったということでしたが，展開像から光合成色素組成上の特徴がよくわかり，緑藻の浅所型と深所型の違いも目で見ることができました。

今回のワークショップでは，学会の直後ということでお疲れのところにもかかわらず，講師の先生方や実験センターの職員の方々，センター常駐の学生の方々による熱心なご指導やお世話のおかげで，大変充実した4日間を過ごすことができました。この間に得た出会いや藻類に関する知識は私にとってかけがえのないものになると思います。特に私が感じましたのは，あるがままの海藻を見ているんだなあ，という実感です。実験センターの目の前には，素晴らしい鍋田湾の自然が広がっており，実習もその自然の一部に溶け込んでいるような気がしました。そのような素晴らしい自然の一部に触れさせていただいた，そういう印象を受けた今回のワークショップでした。

最後になりましたが，いろいろとお世話下さいました，講師の先生方，そして筑波大学下田臨海実験センターの職員の方々，学生の方々，お忙しいなかいろいろと便宜を図って下さいました横浜先生にこの場をお借りしてあらためてお礼申し上げます。

参加者（五十音順，敬称略）

金井塚恭裕（東京学芸大学・生物），栗原暁（長崎大学・水産），辻彰洋（京都大学・生態学研究センター），原朋之（神戸大学・自然科学），松山和世（東京水産大学・藻類），村岡大祐（北海道大学・水産）

講師（五十音順，敬称略）

青木優和（筑波大学・下田臨海実験センター），倉島彰（三重大学・生物資源），前川行幸（三重大学・生物資源），村瀬昇（水産大学校・生物生産）

（657-0013　神戸市灘区六甲台町1-1　神戸大学大学院自然科学研究科）